

「松任城と手取川の戦い」(=タイトルフリップボード)・脚本

(前説)



戦国時代、わたしたちの祖先が活躍した松任城を知っていますか。

加賀の国の人々は、一向宗と呼ばれた浄土真宗の教えを心の支えとし、信仰と自由を守るために戦っていました。

南に北に加賀を侵略する敵の軍勢を追い返そうと、金沢御堂や松任城から出陣していたのです。加賀は武士を巻き込んで、僧・武士・農民や商人らが、話し合いをして治める国を形作っていました。その支配の姿を石川郡清沢(現在の鶴来町)の願得寺実悟は『実悟覚書』に、「百姓ノモチタル国」と形容しています。信仰の中心地として設けられていた金沢御堂には、浄土真宗本山の大坂本願寺から僧と坊官(武将・本願寺家臣)が派遣されていました。

戦国大名の戦いの時代、尾張の織田信長が越前の朝倉義景を滅ぼし、加賀へ攻め入って来るのです。そこで大坂本願寺は、長年敵対していた越後の上杉謙信と同盟して加賀の国を守ろうとします。

松任城は、手取扇状地に築かれた「松任組」の拠点でした。城主は有力寺院松任本誓寺一族の武将鏑木頼信です。鏑木氏とは、石川郡随一の強力な戦力を持つ「松任組」を率いる旗本です。

時は戦国時代、今から400年余り前のころのことです。人々は武士による横暴な独断的支配を拒み、自らの力で信仰と自由を守るために一所懸命に生きた時代。日本の歴史に燦然と輝く加賀一向一揆の物語です。

松任城の中心部は、今も城址公園として、わずかにその面影をとどめています。

○登場人物（武将）

大坂本願寺坊官・家臣／^{しもつきらいじゆん}下間頼純（加賀一向一揆総大将、^{かなざわみどう}金沢御堂総司令官）

^{しちりみかわ}七里三河（^{かなざわみどう}金沢御堂総司令官）・^{わかばやしながと}若林長門（^{かなざわみどう}金沢御堂軍事指揮官）

加賀一向一揆武将／主人公＝^{かばらぎまりのぶ}鏑木頼信・^{かばゆ}同勘解由（^{まつにき}松任組旗本・^{まつにき}松任城城主）

／^{すすきでわのかみ}鈴木出羽守（^{やまのうちぐみはもと}山内組旗本・^{うすぎけんしん}鳥越城主）

戦国大名／^{おだのぶなが}尾張織田信長・^{あきくらすよしかげ}越前朝倉義景・^{うすぎけんしん}越後上杉謙信

^{しばたかついえ}織田家家臣／^{しばたかついえ}柴田勝家（^{おだのぶなが}織田北陸方面軍総大将）

（註）・・・参考。（必要に応じ利用してください。不要な場合は割愛してください）

*当時（中世）、^{どごう}土豪・^{しやうえん}荘園の下級官吏（^{しやうかん}荘官）、^{のうみん}農民・^{しやくじん}職人・^{しやうじん}商人・^{げいのうしや}芸能者などは「百姓」と見られた。彼らは自主自律した^{そうそん}惣村と呼ばれる自治の村に住んだ。戦国武将と呼ばれる連中はこの層から多く出た。加賀でも一揆の中核を占めた人々、時に武士がこれを率いた。

○^{かなざわみどう}金沢御堂＝^{てんぶん}天文十五年(1546)、加賀門徒の政教一致の政庁として設けられる。本願寺から派遣された^{みどうしゆう}御堂衆（僧）・^{ぼうかん}坊官（特に^{ぞくじ}俗事・外交・軍事を担った）によって指導運営された。^{かなざわぼう}金沢坊・^{みやま}御山ともいう。

^{かなざわみどう}金沢御堂を中心に^{じないまち}寺内町が築かれる。町は^{じやうへき}城壁・^{ほり}土塁や濠に囲まれ、信仰の拠点であると同時に^{けいぎ}経済活動も盛んに営まれていた。金沢という地名はこのころから称される。

○「^{ぐみ}組」とは、江戸期^{ほん}「藩」の萌芽的な形態機能。加賀四郡は「^{ぐん}郡」「^{ぐみ}組」（^{ぐん}軍事・^{ないせい}内政・^{さい}財政）と「^{こう}講」（^{しんぎやう}信仰・^{さい}財政）という組織で機能していた。のち「^{かなざわみどう}金沢御堂」が^{しゆごだい}守護代的（^{がい}外交・^{ぐん}軍事・^{ないせい}内政・^{さい}財政）な機能役割を担う。「^{ぐみ}組」は本願寺が旗を与え、一人の旗本が率いた。

○^{まつにき}松任城／^{ひらのべ}平野部に築かれた平城で濠が周囲を囲っていた。北国街道を押さえ、近くには手取川の旧河道が流れる交通の要衝でもある。松任氏が築いたとされるが、松任氏と鏑木氏の関係が諸説あってはつきりしない。

○^{せいざわみどう}清沢願得寺^{じつご}実悟／^{れんに}蓮如の十男。はじめ兄蓮悟が住持の若松本泉寺に住した。後、石川郡清沢（現在の鶴来町）願得寺に入る。『実悟記』など多くの著述を残した。

D. 紙芝居 松任城と手取川の戦い

構成	Visual	Narration
----	--------	-----------

F-1 松任組出陣風景



わずかな留守の兵を除いて、城内は穏やかに静まり返っていました。金沢御堂からの命令によって、松任組が越中へ出陣したのは元龜三（1572）年六月、暑い盛りのことです。

触れ太鼓が打ち鳴らされると、田植えを終えた村人は鎧を着こみ、刀、槍を手に携え、松任組の兵として城へ集まってきました。城の広場で村ごとに隊列を整えると、松任城主鑄木頼信に率いられた軍勢は出陣し城をあとにしました。

勘解由は出陣を願い出たのですが、父頼信からは城改修と留守を任されていました。

（城主鑄木頼信）「城の改修は一刻の猶予もならぬ。濠は十間（約18m）ばかりに広げよ。土塁は二間（約4m）まで高く搔きあげ、櫓も組み上げるのじゃ」

（息子鑄木勘解由）「櫓も、ですか」

（頼信）「そうじゃ、広い濠に櫓を組み合わせたならば攻めるのは難しい」

（勘解由）「櫓から横矢を射るのですね。城づくりには、沢山の材木も要りますが」

（頼信）「劔（鶴来）村から取り寄せよ。すでに話は通してある。材木は改修した用水で城近くまで運ぶのじゃ。さすれば、わずかの人手で多くの材木が用意できよう」

F-2 惣村風景松任の村々 ②-1



五月、田楽の囃子に合わせ、松任の村々では盛んに田植えが行われていました。田植えを終えた村々から、城の改修に集まってきた人夫の多くは老人、女衆です。改修には人手が少しでも多い方が好いのです。男衆がすでに出陣した後の村を任されていた者たちです。工事の人夫には食事が用意され、わずかな手当てでも与えられていました。なんといっても笛や太鼓で踊り、音頭を取って囃し立て、皆の力を合わせる作業は汗もうれしいものです。

F-3 戦いへの備え ②-2



材木も大量に集まり、櫓は思いのほか順調に建ちあがりました。勘解由は家老を伴って櫓に上がっていました。眼下には、松任城を囲む濠が広がり、豊かに水をたたえてきらめいています。改修はいち早く仕上がっていました。老いた村人も背筋を伸ばし、女衆も力を合わせ働いたお蔭です。

(勘解由)「これで多くの田んぼに、水を張ることができますね」

(留守家老)「若、よくお気づきになった。この御城の大きな濠にたたえられた水が、大きなため池になることを知って、村ノ衆もあのように喜んでおりますぞ」

年老いた家老は、成長した勘解由の姿をみて、頼もしげに目を細めました。

新しく組み上げた櫓からは、西に日本海を望み、東には遠く金沢御堂の麓が輝いています。松任城は手取扇状地を守る要の城であったのです。

F-4 上杉謙信との戦いに勝利し、松任組が凱旋する



越中では南加賀から江沼・能美二郡の援軍も駆けつけ、辛うじて加越国境で越後の猛将上杉謙信を追い返していました。わけても国境の朝日山城ではありったけの鉄砲を揃え、一揆勢が激しい銃撃を加え勝利するのです。

久しぶりに松任へ凱旋してきた松任組の兵は、鎧も破れ、無精ひげに覆われた顔でしたが、笑顔にあふれています。南無阿弥陀仏と墨書きされたのぼり旗が、誇らし気にはためいています。

城の改修に携わっていた留守衆や女衆が、戦場の塵にまみれた夫や息子たちを歓呼の声で出迎えます。

F-5 城内、鏑木頼信・勘解由父子 ②-1



(頼信)「勘解由、よくやった。見違えるようじゃ、広がったのう見事な濠じや」

満々と水をたたえる濠は、広く深くなっています。

(勘解由)「北の上杉勢が攻め込んできても、南から織田勢が手取川を渡り戦となっても、この城は簡単には落とせません」

勘解由は満面の笑みを浮かべ、城に帰ってきた父頼信に向かい改修を報告しました。城の絵図面を広げ、改修したカ所一つひとつを指さし、難攻不落になったことを話します。陽に焼け、口ひげをたくわえた父の顔はたくましく、まぶしく見えます。

(勘解由)「父上、新たに組み上げた櫓の土塁の高さは二間半(約5m)、濠も十三間(約23m)の広さに及びます」

(頼信)「良き備えに仕上がった。松任城は加賀一番の名城じゃのう」
家老の助けがあつたとはいえ立派に留守を勤め、短い日にちで城の改修を成し遂げ、父にほめてもらいました。初陣を終えたが未だ元服して間もない勘解由は、心の底からうれしいと思いました。

翌、天正元(1573)年、織田勢が越前の朝倉義景を攻め滅ぼし、越前を占領します。

天正二年が明けると、越前一揆衆からの援軍を願う報せを受けた大坂本願寺では、越前一向一揆総大将として重臣を越前へ下します。金沢御堂からは、武將を付け加賀一揆衆を越前へ送り込み、越前一国を一揆の持ちたる国とします。

天正三(1575)年夏、織田勢は再び越前に攻め込み、勢いに乗じて加賀の南二郡を占領してしまいます。

F-6 城内、頼信・勘解由父子 ②-2

(勘解由)「父上、宿敵上杉謙信殿と同盟するというのは真実でしょうか」



すでに勘解由も凛々しい若武者となっていました。

越前から有力門徒や旧朝倉家家臣が、織田信長勢に追われ、金沢御堂に来ていました。このような情勢に、本山大坂本願寺では上杉謙信と同盟し、織田信長との戦いに備えようとします。北加賀から石川・河北二郡の旗本衆が南加賀に出陣し郷土を守ろうと戦っていました。時に、金沢御堂では戦いの行く末に軍議を重ねていたのです。

(勘解由)「そもそも加賀の旗本衆がこぞって、長年の敵であった上杉謙信殿に降らねばならないのでしょうか」

(頼信)「越前で一揆衆が立ちあがり、占領していた織田勢と戦う一方、金沢御堂へしきりと援軍を求めていた。我ら旗本衆も七里三河様に、上杉謙信様が御出馬することを願い出ておったのじゃ。すでに我らのみでは、織田の侵攻を防ぎ止めることは困難じゃ」

(勘解由)「越前の一揆勢を助けようと、松任組の軍勢と一緒に私も南二郡まで駆け入り、織田方を討破りました。織田勢は大聖寺城からは一歩も出ることはできず、落城寸前でありました。わたしも兜首を一つ獲ております」

つつい武功を誇る。勘解由は松任組の中で若武者ぶりを見せていました。

(頼信)「ふむ、手柄であった」

F-7 越前一向一揆文字瓦

越後との同盟の願いもむなしく、上杉謙信の出馬はついにありませんでした。越前の一揆の戦いは孤立し、織田方によって生け捕りにされた一揆衆は磔や釜で焙られ皆殺しにされます。越前一揆衆は無念の思いを文字瓦に書き残していました。

(勘解由)「上杉勢が援軍として出陣していたならば、大聖寺城に籠る織田勢を蹴散らし越前に攻め入る絶好の機会でした。越後からは上杉勢が援軍として出発したとは聞きません、無念です。口惜しいことご



ざいます」

勘解由は、父に疑問をぶつけます。

F-8 七里三河との対立、金沢御堂大広間

(頼信)「我らは上杉勢との同盟に異を唱えているのではない。むしろ願っていた。七里三河様の横暴独断に異議を申しているのじゃ。織田勢に対する備えを進言しても、素知らぬ風。南加賀二郡に侵入した敵のなすがままに、手をこまねいていた。あれほど進言した上杉謙信様の御出馬も、とうとう機会を逃された。そのうえ、国の行く末は合議のうえ決する約束を無視された。我ら旗本衆の立場を蔑ろにした行いに、腹を立てているのじゃ。我らは、七里三河様の家臣ではない」



頼信は持っていた扇子をはっしとたたき、空をにらみつけるのです。

(頼信)「我ら、総大将として七里三河様を仰ぐこと、もはやできぬ」

F-9 山内衆、松任城を囲む



天正四（1576）年秋、松任城を白山麓の山内勢が取り囲みます。旗本鈴木出羽守率いる山内組です。七里三河から「松任組の鑓木頼信を成敗せよ」と命じられて出陣していました。この事態に石川・河北二郡の旗本衆が動きます。本山大坂本願寺へ状況を報せるとともに、金沢御堂の七里三河の独断を訴える書状を送ります。さらに「同志討ちは避けるべき」と、松任城を囲んでいた山内組と城方との間に割って入りました。

F-10 金沢御堂新総大将 下間頼純着任



「加賀は、昨年以來混乱状態です。すでに南加賀へ織田勢が乱入しています。本山大坂本願寺から派遣された七里三河様を総大将として仰ぎ、何事も相談してことに当たって参りました。しかし、このたび鑓木殿に反逆ありと決めつけ、山内衆を引きだし松任城に討ち果たそうとされました。鑓木殿の罪は事実無根のうえ、事前に我等にひと言の相談もなく処罰されました。本山においては七里三河様のなされたこと、きっと明らかにされんことをお願い申し上げます。天正四年八月二十一日」と石川・河北二郡の旗本衆は連名で大坂本願寺へ書き送ります。

書状を手にした大坂本願寺は慌てます。本願寺重臣下間頼純を急ぎ加賀へ送り、七里三河を解任します。本願寺では、金沢御堂の新たな総大将に下間頼純を据え、加賀一向一揆の総指揮を任せました。

（下間頼純）「直ちに、松任組旗本鑓木頼信をゆるす」

天正四年十一月、着任早々下間頼純がなした仕事です。すでに上杉謙信の仲立ちもあって、和解は問題なく進みます。

金沢御堂の下間頼純を総大将にして、石川・河北二郡の旗本衆、御堂に身を寄せている江沼・能美二郡の一揆衆、越前から亡命していた武将らは、本山大坂本願寺の命令に従って上杉謙信と同盟し傘下に入ります。

F-11 織田信長勢、能美郡の村々を焼き払う



天正五（1577）年夏、上杉勢は七尾城を攻めました。八月、信長は柴田勝家を総大将とし、四万の軍勢で七尾城救援の軍を起します。加賀一揆勢は能美郡の御幸塚城を固め、さらに兵を進め粟津口谷戦で織田勢に対し奮戦します。

九月に入ると織田勢は手取川まで進出し、一帯を焼き払います。三日前に七尾城は上杉勢によって落城していたのです。それを知らずに織田勢は北加賀を一息に攻め抜こうとして、手取川を渡り、水島に陣を敷いていました。

歴戦の加賀一揆勢は、鶴が翼を広げたように横に大きく広がって陣を張り、これを迎えます。一揆勢の背後には強兵である上杉勢が控えています。上杉勢と一揆勢は迅速に行動していました。松任城にはすでに上杉謙信が入城し本陣を設けていたのです。

（鎬木頼信）「松任城主鎬木頼信にごさいます。控えるのは子勘解由にごさります。御屋形様（上杉謙信）には、この城、存分にお使い下さいませ」

（上杉謙信）「ふむ、聞いておるぞ、そなたが鎬木か。良き構えの城じゃのう」松任城を本陣とした上杉謙信の前には、一揆勢の指揮官である若林長門を始め、鎬木頼信など歴戦の石川・河北郡の旗本衆がずらりと並んでいます。

（上杉謙信）「相川の浜に、七尾城で討取った首を掲げよ」

謙信の命に応じて、素早く七尾城の重臣長一族の首が懸けられます。これを見た織田勢は七尾城落城を知ることになります。

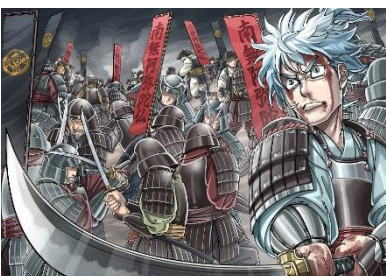
F-12 手取川の戦い

柴田勝家は上杉勢がすでに松任城に入っらしいと聞き、不利を悟って退却の陣払いを命じました。

（柴田勝家）「夜、闇に紛れて兵を引け」

秋の長雨で手取川は増水しています。松任城に本陣を構えていた上杉謙信は、織田の動きを捉えました。

（上杉謙信）「この機を逃がさず、手取川へ追い落とせ」と命を下します。



松任城内にはほら貝が吹かれると、手取扇状地に村ノ道場の早鐘が次々と鳴り響いていきます。

この夜、織田勢は千名余が討ち取られ、手取川の激流に流されたものも大勢いたといひます。

戦いは、加賀一揆と上杉勢の大勝利に終わります。

「上杉に逢うては織田も手取川 はねる謙信 逃げるとぶ長（信長）」と都の人々のうわさになったそうです。

F-13 金沢御堂落城



織田勢が加賀へ攻め込んできて以来、手取川を天然の濠として、五年の月日を一揆勢は必死に戦ってきました。天正五年には手取川を越えてきた織田勢を川の流れに追い落とします。だが、織田勢は停戦の約束を相次いで破り捨て、天正八（1580）年、春、金沢御堂は柴田勝家に攻められ落城します。石川郡一揆の最も強大な戦力松任組を率いた鍋木頼信と勘解由親子は、信仰と自由を守るため金沢御堂に籠城戦を果敢に戦って破れ、討ち死にしてしまいます。

松任城は鍋木氏に代わって、豪勇を謳われた若林長門が守っていましたが、秋、柴田勝家によって騙し討ちにされ落城します。石川郡の象徴であった城は、織田方に占領され、この日をもって松任組一揆衆の城塞としての幕を閉じることになるのです。

(2016年9月30日・本文最終稿 にしで やすのぶ)